

言語文化研究科

I	研究水準	研究 12-2
II	質の向上度	研究 12-3

I 研究水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

1. 研究活動の状況

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「研究活動の実施状況」のうち、研究の実施状況については、著書・論文の発表数が平成 16 年度 78 件、平成 17 年度 94 件、平成 18 年度 118 件と着実に増加しており、また、紀要に厳密な査読制度を導入し、萌芽的・実験的な研究の育成を目的とした報告書刊行に予算を配分するなど、研究活性化のための努力が払われている。研究資金の獲得状況については、科学研究費補助金の専任教員一名当たりの件数は 0.4～0.5 件であり、人文系としては比較的高い水準を維持し、平成 19 年度においては件数、金額共に大幅に増加しており、順調に研究が行われているなどの相応な成果がある。

以上の点について、言語文化研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究活動の状況は、言語文化研究科が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

2. 研究成果の状況

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「研究成果の状況」について、学術面では、メディア情報学、日本文学、言語学、ヨーロッパ語系文学等の分野で先端的な研究成果が生まれている。卓越した研究成果として、例えば、江戸時代からの色男の特性の変遷を探究した研究、日英語の動詞形成を形態論的に明らかにする研究、動詞の意味的アスペクトを中核に構文分析を試みた研究等が上げら

れ、学術面で権威のある賞を受賞した業績も少なくない。社会、経済、文化面では、卓越した研究成果として、映画研究や社会史研究に極めて重要な外国語文献の優れた翻訳があり、優れた研究成果として、GHQ カメラマンが戦後の日本を撮影した写真集の編集があるなどの相応な成果がある。

以上の点について、言語文化研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究成果の状況は、言語文化研究科が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

II 質の向上度

1. 質の向上度

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

相応に改善、向上している

[判断理由]

「大きく改善、向上している」と判断された事例が 2 件、「相応に改善、向上している」と判断された事例が 1 件であった。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間終了時における判定として確定する。